明治日本の産業革命遺産－海外研究者が評価した集成館事業－

株式会社島津興業　尚古集成館　館長　松尾　千歳

2015 年 7 月、「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼・造船・石炭産業」が世界文化遺産に登録された。この世界遺産登録には、日本人だけでなく数多くの外国人研究者が係わっていた。私も最初から係わっていたので、外国人研究者の方々の姿も目の当たりにしたが、その際に感じたのは、日本人より外国人研究者の方が登録に熱心だということであった。

最初に接した外国人は、2002 年に都市経済研究家の加藤康子氏が連れてこられた国際産業遺産保存委員会事務局長スチュアート・スミス氏であった。スミス氏は、なぜ 19 世紀に非西欧諸国の中で日本だけが植民地化を免れ、しかも近代化・工業化に成功したのか疑問を抱かれ、その答えが日本の近代化・工業化が始まった鹿児島にあると来鹿されたのである。

私が説明役を仰せつかり、まず反射炉を説明した。オランダの本を参考に造ったと説明すると、その話を遮って「外国から輸入していないのか？」「西欧人技術者は来ていないのか？」と質問された。私が「輸入していない」「外国人は係わっていない」と説明すると、「君の話は信じられない。技術というのは文章化できない。いくら本を読んでも鉄は溶けない」と反論された。

これに対し、私は鎖国体制下でそうせざるを得なかったこと、またそれが可能だったのは本を通じて得た知識を、日本の知識・技術に置き換えたことを説明した。耐火レンガの製造を薩摩焼でなどと具体的に説明し、さらに 1858 年に集成館を視察したオランダ人が、本を頼りに様々なものを造っている様子を記した文章（英文のものもある）を書き残しており、それをさし示すと、スミス氏も納得し、「面白い」と言ってくれた。その後、加藤氏・スミス氏は、ICOMOS 名誉会員のクリアー氏、イングリッシュヘリテイジ総裁のコソン卿らを集成館に連れてこられ、私に「自分にしたのと同じ話をしろ」と説明を求められた。

そしてコソン卿を総括委員長に、東京大学の西村幸夫教授を委員長、スミス氏を副委員長とする専門家委員会が設置され、工学院大学の後藤教授ら日本人研究者とともに、ICOMOS カナダ会長・ICOMOS 前事務総長のディヌ・ブンバル氏、ICOMOS オーストラリア前会長マイケル・ピアソン氏、オランダ国防省軍事史研究所研究員アラン・レマーズ氏、世界遺産コンサルタントのバリー・ギャンブルら外国人研究者が委員に名を連ねた。彼ら外国人専門家の協力・支援のもと世界遺産登録が実現したのである。